

# 九楊先生の ふるさと豆辞典

「もう二度と帰ることはないかもしれない」とふるさと武生を離れ半世紀以上。とはいえ、原点はふるさと福井。そんな九楊先生の独断と偏見あふれるお国自慢。

## 閑話九題

- ① **たけふ菊人形** 【越前市武生中央公園】  
たけふ菊人形が始まったのは昭和27(1952)年。大阪府枚方市の菊人形がモデル。私の父が市役所の商工課員として企画、実現。自宅「藤娘」など菊人形展のポスターの原画までを描いていた。
- ② **夜叉ヶ池** 【南条郡南越前町】  
福井・岐阜・滋賀三県の県境、標高約1200メートルの山頂近くにある、龍神伝説が伝わる神秘的な池。泉鏡花の戯曲に「夜叉ヶ池」がある。小学校5年のときに登山。透きとおった水中に黒と赤のアカハラ(いもり)ばかりで、魚影のまったく見えない静寂の池。私の高所恐怖症はこの登山から。
- ③ **岡太神社・大瀧神社** 【越前市大滝町】  
大滝町は越前和紙の主産地。「和紙の神」をまつる神社。とりわけ二層の檜皮葺の屋根の様式は圧巻。ちなみに日本初のお札は福井藩の製造。黒透かし越前和紙職人の手による。
- ④ **花筐公園** 【越前市栗田部町】  
数多い花見名所なかでもおすすめ。産声をあげた母方の実家の近く、春・夏の休みにはよく遊びに行った。公園全体に桜があるが、とくに薄墨桜は名高い。ただし中腹まで登らないと見ることはできない。公園名は世阿弥の謡曲「花筐」(はながたみ)にちなむ。
- ⑤ **平泉寺白山神社** 【勝山市平泉寺町】  
若くは京都松尾の若寺こと西芳寺? いやいや、否否、若の深さといえスケールといえ、白山神社にはかないや。梅雨どきから夏にかけて境内すべてが苔で埋め尽くされる美しさは忘れがたい。国史学者、平泉澄はこの出身。
- ⑥ **那谷寺** 【石川県小松市】  
福井県に近い石川県の浄土真宗証如ゆかりの寺院。中学時代の遠足で出かけ、当時写真部員としてシャッターを切りまくった記憶がある。何ゆえか、大きな忘れものをしたようで、もういちどどうしても訪ねてみたい寺。
- ⑦ **奥越の紅葉** 【大野市・勝山市】  
九頭竜川の上流を流る奥越の紅葉は見事。紅葉ばかりではなく、切り拓いて植した緑の杉も垣間見られるが、その生活と歴史とともにある自然の景色がなんともいとおし。
- ⑧ **村国山** 【越前市村国町】  
かつて武生は漢学者の多い土地柄だった。そこで村国山を香炉峰で名高い中国の名山になぞらえて廬山と呼んだ。家の窓から見える廬山に春夏秋冬、私はいろんな言葉をかけ、よき相談相手になつてもらった。
- ⑨ **三国海水浴場** 【坂井市三國町】  
今もあるのだろうか。母方の祖母は三国の旧舟問屋の舟屋の出身で夏は家族で海水浴に。キラキラまぶしい夕陽が周囲の砂や建物を金色に光り輝かせたシーンは今も鮮やかに記憶に残る。崖の上の老舗旅館が閉店したと聞いたが。

## いまでも残るか? 福井弁

- ① **べとにばいをちつくりさす**  
福井弁の華。おそらく他県の人にはちんぷんかんぷん。べとは泥土、ばいは棒、ちつくりさすは直立に刺す、という意味。
- ② **おちよきん**  
これは「直繁」の漢語に由来か。正座すること。親は子をしつけた。「おちよきんしねま」——正座しなさいと。
- ③ **じよろかく**  
本願寺中興の祖・蓮如の里。仏教王国、福井。「丈六仏」からきたか。あぐらをかくこと。
- ④ **いもけ**  
京に「いげず」や「じゅんさ」人がいるように、土地の人柄に特徴的な性格があり、それを指す独特の言葉がある。福井では「いもけ」。引つ込み思案、ぐずぐずした人。
- ⑤ **しゃべりばち**  
「いもけ」が「しゃべりばち」も。おしゃべりの「撥」か。「いもけ」同様、過ぎたるは及ばざるがごとし、好ましい人ではない。
- ⑥ **てきねえ**  
別段「敵がいな」わけではない。体調がすぐれないこと。関西では「しんどい」を福井では「てきねえにやわの」。
- ⑦ **だわもん**  
ダメな者という意味か。なまけもの、さぼり、横着者。
- ⑧ **もつけねえ**  
「もんつけねえ」とも。かわいそう、気のどく、気をもむというような意味。
- ⑨ **うら**  
「わたし」のこと。複数形は「うらら」。共同意識の高さから「うらら」をよく使う。「うら」はこうわべ、表日本とはころ日本。「おれ」はうらわべ、表日本とはうらわべ日本。

## おいしい福井

- ① **塩練うに** 【坂井市三國町】  
越前の塩練うにはパフソウニの卵巣を塩で練りあげて作る、贅沢な逸品中の逸品。箸の先に豆粒ほどをつけて酒一合、または白飯に一口。他県の人に自慢が食べたところ、一口なめたたん黙って頭を下げた。
- ② **ズボガニ** 【越前海岸沖】  
地元では越前ガニ(オスのズワイガニ)はまず食べない、食べられない。セイコガニ(メス)はかつては子どものオヤツ。ここだけ内緒のおすすめは、ズボガニ(水ガニ)。脱皮してすぐの甲羅の柔らかいズワイガニ、地元でなければ食べられない。みずみずしく、殻からズボツと身がはがれるのでこの名があるとか。
- ③ **水ようかん** 【福井県下】  
「冬、こたつ」といえば福井では「水ようかん」を連想する。夏の涼菓子ではなく、冬に食べる。近畿圏には「丁稚ようかん」があるが、水ようかんは水分と糖度のバランスが絶妙。「ツルツ」とひと口。水ようかんはこたつで口にするに限る。
- ④ **上庄の里芋** 【大野市上庄】  
奥越大野上庄地区の里芋はねばりとコシがあつて、かつ柔らかな絶品。東京赤坂の一流割烹店でもご愛用。上庄里芋を食べるとパワーがみなぎる。
- ⑤ **花らっきょ** 【坂井市三國町三里浜】  
三里浜辺で採れる小粒のらっきょ。通常は一年弱で収穫するが、花らっきょは冬を「回越させる」。小粒で歯ごたえがよく、シャキシャキとした食感が身上。カレーのわき役ではもったいない。れっきとした主役の味わい。紫色のらっきょの花も愛らしい。
- ⑥ **白山すいか** 【越前市白山地区】  
越前市白山地区で栽培される極上スイカ。果肉は真っ赤、真っ赤。栽培量が少なく、地元の人でもなかなか口にできない。時代にかかって大玉で重量感たっぷり。白山地区の気候と土壌、そして丁寧な仕事からできあがる。
- ⑦ **すい** 【嶺北地方】  
紅ずいきを空炒りして、最後に甘酢に浸して寝かせること、まっ赤な「スゴ」ができる。素麺、饅頭、餅など何ぞ夏でも、ましてスコをや。これを食べなや夏ではない。
- ⑧ **コシヒカリ** 【福井県下】  
ほとんど知られていないが、コシヒカリは福井の県農業試験場から生まれた。宣伝上手の越後ではなく越前のコシ。近年新種「いちほまれ」が生まれた。
- ⑨ **焼き鯖** 【福井県下】  
60年代まで、鯛のようにふくらとした大きな真鯖がよく揚がった。焼きたてのアツアツはやわらかく脂がのって美味だった。今はサンマのような鯖ばかり。そこで登場したルウエー産の若狭浜焼き鯖。これはただだけ。若狭の名が泣く。

# 石川九楊の世界

## 書という文学への旅

石川九楊直筆原稿「河東碧梧桐」表現の永続革命より

「模索する石川九楊」1978「はぐれ鳥さへ」シリーズ著作初公開通期  
「若き日の石川九楊」1966「1975未発表作品」石川九楊の現在(自作詩作品集)2001「2020」12月8日展示替え

鑑賞のポイント  
若き日々の未発表作品(初公開)から最新作まで(一部展示替え)  
代表作 話題作 最近著作までの全著書、およびそれらの直筆原稿を展示  
日本最大級の巨大砲台が愛用の書字文房具を展示  
制作風景代表書作品のVTR映像を公開

鬼才・石川九楊の批評と作品はどのように生まれたか。多数の初公開作品からその創作の全貌に迫る。

2020年 10月23日(金)〜2021年 1月24日(日)

観覧無料

福井県ふるさと文学館秋季企画展  
【開館日】火〜金 9時〜19時 土・日祝 9時〜18時  
【休館日】毎週月曜日(1月23日・1月31日)は開館翌日休館、11月4日水、11月26日木、12月24日木、年末年始(12月29日〜1月3日)

【主催】福井県ふるさと文学館  
【後援】福井新聞社・FBC・福井テレビ・丹南ケーブルテレビ・FM福井  
【協力】京都精華大学・ミネルヴァ書房・名古屋大学出版会・株式会社ほぼ日

福井県 FUKUI MUSEUM OF LITERATURE  
ふるさと文学館

福井県 FUKUI MUSEUM OF LITERATURE  
ふるさと文学館

〒918-8113 福井県福井市下馬町51-11  
TEL 0776-33-8866 FAX 0776-33-8861  
E-mail bungakukan@pref.fukui.lg.jp  
HP http://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/



フレンドリーバス(無料)  
JR福井駅東口バスターミナルから約15分

路線バス  
JR福井駅西口交通広場5番のりばから  
市内バス(62系統・一乗谷東郷行き)約12分

自動車  
北陸自動車道福井インターより約15分  
国道8号線坂垣交差点を東に折れ約900m

